令和３年度「ふくしまの道徳教育」vol.2

道徳のとびら

福島県教育委員会
令和４年３月８日発行

～校種や業種を越えて 教科の枠を越えて 学びがつながり続ける 広野町の教育～

広野町では、昨年度から２年間、福島県教育委員会の委託を受け、こども園、小中学校、そして家庭・地域が力を合わせて、人権についての実践研究を進めてきました。道徳教育を大切にして町全体で子どもを育ててきた取組を参考に、ご家庭や地域の子どもとの関わりについて考えてみてください。

「広野町人権教育リーフレット（2021年２月発行）」より

家庭における人権教育

子どもの人権意識を育むために、地域や学校において様々な取組がなされていますが、すべての教育の出発点と言われる家庭教育においても、その役割が求められています。家族や親子の日常生活での関わりについて「人権」という視点で振り返ってみましょう。

こんなことはありませんか？

事例1
子ども「今日学校でさ…」
大　人「**今忙しいから、あとにして！**」
（その後、子どもと話をする場をつくらない）

事例2
子ども「この問題分からないんだけど…」
大　人「**こんなこともできないの？全く…**」
（大人目線で、その場の感情で怒ってしまう）

事例3
（うまくいかなかった子どもに対して…）
大　人「**お兄ちゃんは○○だったのに…**」
（兄弟や他の友だちと比べ、優劣をつける）

こんな対応にしてみてはどうでしょう？

何か重要な話があるのかもしれません。しっかり子どもの表情や様子を見てください。その上で「○○なら時間取れるけど、それでもいいかな」と言われるだけでも、子どもは安心しますね。

「できない」「分からない」と言った子どもが勉をかいてしまう状況にあります。この時には「分からないことを自分から質問できた」この行為を褒め、話を聞く姿勢が大切ですね。

このような言葉をかけられた子どもはどう思うのでしょう。結果だけを見て、他と比較するのではなく、これまでの過程を褒めつつ、これからどう対応すればよいのか一緒に考えてみましょう。

聴く

- うなずいたり、あいづちをうったりしながら
  「うん、うん」「それで？」「なるほど」これだけでも「自分は受け入れられている」と感じます。
- 子どもが話すキーワードを振り返す
  「○○なのね」「△△なの？」大人に共感してもらえるという安心感から、自己肯定感も高まります。
- 子どもが話した内容に質問してみる
  「その時どうだったの？」「それで？」子どもは自分に興味をもって聞いてもらえると感じます。

言葉かけ

- 結果よりも過程（プロセス）を重視する
  「ここまでの努力がすばらしいね」
  「これまで本当にがんばってきてよかったね」
  結果もこれまでのがんばりも、どちらも認めてもらえたという嬉しさを感じ取ることができますね。
- "あい"メッセージを送る
  "あい（相）"手の気持ちに共感し、"I（私）"の気持ちを伝えましょう。
  「よかったわね。やったね。私も嬉しいよ！」
  「あなたが楽しそうだと、私も楽しいな」

リーフレットは、右のQRコードから広野町HPにアクセスすると、詳細を見ることができます。

広野中学校では、子どもの豊かな心を育てるために「多面的・多角的に考える」道徳科の授業に取り組んできました。授業では「違いや多様性（考え方や年齢、性別、出身地、国籍等の違いも含めて）」を受け入れ、互いを尊重し合う態度を大切にしてきました。外国籍の方のお話を聞いた時には、「自分の国だけでなく他国の文化や生活習慣も大切にしたい」と話す姿がありました。

また、リーフレットや授業公開をとおして、保護者や地域住民も、人権を尊重できるよう協力を呼びかけています。

〈外国籍の方の話に耳を傾ける子どもたち〉

１日のうち、子どもが学校で過ごす時間は「約８時間」です。残りの16時間を家庭や地域で過ごすことを考えると、学校、家庭、地域のみんなが同じ眼差しで子どもと関わることが大切ですね。

質問タイム

道徳科の授業で書いたワークシートに、お家の人からコメントを書くように依頼がありました。どうしたらよいでしょう？

学校だけではなく子どもの日常生活の全てが道徳教育とつながっています。
学校と家庭がそれぞれの役割を果たし、手を取り合って子どもの豊かな心を育てていきましょう。

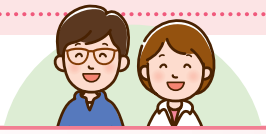
ステップ1
学校で進めている道徳科の学習内容について
まず「知ること」。これが始めの一歩です。
どんな学習をしたか、話を聞いてみましょう。

ステップ2
一生懸命考えたお子さんの考えを受け止めてください。
「なるほど」「よく考えたね」「もっと聞きたいな」

ステップ3
お家の人が感じたことをお子さんに話してみましょう。
「私は、こう思うよ」「小さい頃はこんな風に考えていたよ」

ステップ4
話し合った内容や感想などをコメントに書いてみましょう。
「子どもと話して○○と感じた」「子どもの言葉からこんなことを考えた」

一緒に話すことで、お子さんの成長を感じたり、新たな発見をしたりすることができます。
ぜひ、お子さんと話す時間を楽しみながら、素直な気持ちでコメントしてください。



宝さがしに LET'S GO ふくしま FUKUSHIMA

～未来へつなぐ「人・もの・こと」～

福島県には昔から受け継がれてきた宝物がたくさんあります。オリンピックで新しい宝物も生まれました。
過去から現在、現在から未来へとつながるように、友だちや家族とすごろくクイズにチャレンジしながら、感じたことや気付いたことを話したり、気になる市町村について調べたりしましょう。みなさんにとっての「福島の宝物」を見つけてみませんか。

①～⑬の文字をあてはめると、どんな言葉になるでしょう。

①	⑤	⑨	⑫	⑧	③	④	⑥	⑪	⑩	⑬	⑦	②	い

東京2020オリンピックの○①○リレーは福島県からスタートして全国をめぐりました。さあ！福島県をめぐる旅に出発しましょう！

スタート！ 広野町 楢葉町 川内村

国際理解、国際親善・貢献
いわき市

海に面しているいわき市は、日本の○②文化発しょうの地です。映画でも注目された、ハワイの文化、ハワイの人々の心のシンボルです。

葛尾村 双葉町 大熊町 富岡町

生命の尊さ
浪江町

決して忘れません、東日本大震災。
防災について考えるきっかけとして、後世へ伝えていくためにつくられた県内初の震災遺構です。
「浪江町立請戸○○○③っこう」

南相馬市 相馬市 飯舘村 新地町 川俣町

向上心・個性の伸長
福島市

東京2020オリンピックの、野球とソフト○○④は、県営あづま球場でスタートしました。「あきらめなければ夢はかなう」と話した日本チームの絶対的エースの名前は？
○○⑤ゆきこ選手

桑折町 国見町 伊達市 猪苗代町 三島町 磐梯町 北塩原村 西会津町

よりよく生きる喜び
白河市

すべての垣根を越え、誰もが一緒に取り組めるスポーツ。火の玉JAPANは白河市で強化合宿を行いました。東京2020パラリンピックで話題になった、この競技名は？
○ッ⑨⑩

©Tomokazu Matsukawa

大玉村 本宮市 二本松市 須賀川市 田村市 三春町 小野町 平田村 天栄村 鏡石町

希望と勇気、努力・克己と強い意志
浅川町

浅川町生まれの吉田富三博士は、不治の病と言われていた⑪○研究の先駆者として、その研究を惜しみなく世界へ広めました。
勉強もスポーツも健康第一！日ごろから健康的な生活習慣を心がけましょう。

吉田富三記念館

泉崎村 中島村 矢吹町 塙町 矢祭町 鮫川村 棚倉町 西郷村

感動、畏敬の念
只見町

町全域が「自然との共生、調和」を目的としたユネスコエコパークに登録されています。世界にほこる「只見の○⑧原生林」へ、行ってみませんか？

檜枝岐村 下郷町 南会津町 昭和村 金山町 会津若松市 喜多方市 会津美里町 湯川村 会津坂下町

玉川村 石川町 古殿町 郡山市

ゴール！

未来に向かって！○○⑫、ひとつ、実現する○⑬○○

郷土の伝統と文化の尊重、国や郷土を愛する態度
柳津町

柳津町は○⑥べこ伝説発しょうの地です。この伝統工芸品には魔よけの願いも込められています。今年、街中にファミリーが登場しました！
お母さんの名前は「⑦○こ」。
他のファミリーの名前もぜひ調べてみてください。

心が動き体が動く！生き方を見つめる道徳教育
～道徳推進校の取組から～

体験活動を通して「地域について学ぶ」
下郷町立下郷中学校

下郷中学校の第２学年では、地元に長く愛されている蕎屋を訪問して地域おこしについて考えたり、「福島県もりの案内人」としてボランティア活動を行っている小椋勝美さんを招き、地域の発展について話を聞いたりしました。
「伝統を受け継ぐにはどうしたらよいか」と日々、町のことを考えて仕事をしている地域の方の思いを知り、「私も将来、町に役立てる仕事に就きたい。」と憧れをもったり、普段、当たり前に生活している自分たちの地域の新たな魅力に気付いたりして、郷土への理解を深めました。

ICTの必要性を見極めながら取り組む道徳科の授業
新地町立尚英中学校

尚英中学校では、ICTを活用しながらも、本音で話すことができる道徳科の授業を目指しています。誰もが、自分の弱さを表出することをためらいがちですが、それを乗り越えて、自分の考えを話したり、自分とは違う友だちの考えを聞いたりすることで、自分自身を見つめ直すことを大切にしています。何よりも、本音を受け止める先生や学級の友だちの存在が欠かせません。ICT活用によって、自分と友だちの考えを比べやすくなりました。さらに、話し合った後には自分の考えをPCに累積し、授業を振り返っています。

家庭・地域と紡ぐ温かな心 ～つながれ・広がれ・石井のわ～
二本松市立石井小学校

石井小学校は、「家庭・地域とつくる道徳教育」を、道徳科を中心に、学級活動、総合的な学習の時間においても進めてきました。道徳科の授業では、「自己を見つめる時間」を大切にし、子どもたちは、学習内容とこれまでの経験等を結び付けながら、考えを深めました。保護者参加の授業では、考えたことを、友だちや先生、そして友だちのお母さんやおばあちゃんにも伝えました。「すごいね。○○ちゃんならできるよ。」と、褒められたり励まされたりすると、子どもの笑顔がこぼれました。参加した保護者は、「みんなが我が子のように思えてきました。」と話していました。

「モラル・エッセイ」コンテスト最優秀作品

県教育委員会では、毎年「モラル・エッセイ」コンテストを行っています。今回紹介するのは、令和３年度の部門別最優秀作品です。次は、みなさんの心温まる体験談やすてきなエピソードを、是非お聞かせください。

＊中学生の部　「カール先生と甚平と雪駄」

いわき市立小名浜第二中学校　３年　木村友織香

私の学校には、カール先生というALTの先生がいた。私たちが中学校に入学してからずっと、熱心に英語を教えてくれた。とてもパワフルで、フレンドリーで、たくさんの生徒から好かれていた。

そのカール先生が、今年の夏、母国であるアメリカに帰国することになった。私は卒業するまで、ずっとカール先生に英語を教えてもらえると思っていたので、その知らせを聞いたとき、ショックでしかなかった。

ついに最後の授業の日。教室に現れたカール先生は、甚平と雪駄を身にまとっていた。この甚平と雪駄は、どうやら先生方からプレゼントされたものらしい。私はその話を聞き、まず、先生方の粋な計らいに感動した。日本が大好きなカール先生にとてもぴったりだと思うのと同時に、「アメリカに戻っても、日本や私たちのことを忘れないでね。」「日本から応援しているよ。」といった温かいメッセージが込められているような気がしたのだ。

そして、プレゼントされたものをすぐ身に付けるカール先生の行動にも驚いた。日本人は、いただいた物を本人の前であけることは失礼というような感覚を持ち合わせているように思う。しかし、カール先生のように、自分がプレゼントした物を目の前で見て、喜びをすぐに伝えてくれたら、お互いに幸せな気持ちになることは間違いないだろう。実際、先生方もカール先生の甚平姿を見て、とても嬉しそうな顔をしていた。

最後の最後まで、私たちはカール先生から英語だけではなく、日本人と外国人としての交流や、日本という国にとらわれない考え方を教えていただいた。カール先生と過ごした二年とちょっとの時間は、言葉はうまく伝わらなかったかもしれないが、楽しい時間であり、私たちに幸せをもたらしてくれたと思う。

改めて、人と人とを繋ぐものは、言葉ではなく、心であるということを強く感じることができた。

＊高校生の部　「民話の語りを通して」

福島県立会津農林高等学校　３年　大竹　美保

「なんだぁにしぁ、むずせなぁ。いっぺぇうまっちゃから、ぶんなげらっちゃのがぁ。」これは「身知らず柿の話」という会津坂下町の民話の一部です。私は昨年全校生への「読み聞かせ」で「語り部」としてこのお話を披露しました。

私が語り部をやろうと思った理由は、図書委員会で実施した「民話勉強会」で語り部の先生の語りが素敵で、直感的にやりたいなと思ったからです。また思いの外、他の人が会津弁を話せず驚いたと同時に、やらなければという使命感にかられました。私には祖父母がおり、小さな頃から方言にはなじみがあります。そんな私でも完璧に話し、理解することはできません。方言を話せなければ方言と相性のいい民話まで失われてしまいます。民話は古人の知恵話もあり、守るべき価値のある温かい伝統文化であると思いました。

「読み聞かせ」の担当が私になり、練習を重ねましたが、標準語との抑揚の違いに苦労しました。練習は先生の語りを録音し、自ら声に出して反復する方法です。何度か先生が来校し、語尾の発音や間などの指導をしてくださいました。だんだんと抑揚が会津弁に近付き、「上手になったね。」と褒めていただけるようになりました。全校生の前での発表は放送によるもので緊張しましたが、お話の情景を思い浮かべ、練習通りの落ち着いた発表ができました。発表後に同級生や先生方に「上手だったね。」と言葉をかけられ達成感と充実感を得ることができ、貴重な体験となりました。何より語り部の先生から「立派だったね。継承してくれてありがとう。」という手紙をいただき、とても嬉しく思いました。

民話は失われつつある大切な伝統文化です。方言と共に残された先祖の言葉であり知恵であり、消えてしまえば戻ることのない尊い文化です。私は先祖から受け継いだ伝統の灯を絶やさないためにも、今後どんな形であれ、語り部の継承を続けていこうと思います。

＊一般の部　「家族」

大竹　英子

十三年前、主人が目の不自由な義姉を引き取り、三人で暮らすようになりました。義姉の夫が亡くなり、一人で生活をするのは無理だったのです。義姉は糖尿病や高血圧の疾患を持っています。一日に四回、インスリンの注射をしなければなりません。目が見えない義姉に代わり、私が責任を持って注射を打つことになりました。

十年前、東日本大震災が起きましたが、その一週間後、夫が避難中にがんで亡くなりました。残された義姉を連れて、各地を転々とし、会津若松市に避難してきました。慣れない土地で生活するのに、不安だらけでした。言葉で表現ができないほど、辛い日々を過ごし、泣いてばかりでした。

ある日、会津若松市に大熊町立小・中学校が移転されたことを知りました。「学校で学びたい」という思いが強くなりました。私は中国出身のため、日本語で分からないことがたくさんあるからです。そのことを義姉に話しました。すると「勉強するのは良いことだ！英子の夢は、縁のある方に感謝の手紙を書くことでしょう。」と義姉が言ってくれました。そして、大熊町教育委員会にお願いし、聴講生として勉強させていただくことになりました。

学校で勉強をしたり、義姉の介護をしたり、私の生活は忙しくなりましたが、充実し始めました。私が書いた手紙を音読し、それを聞いた義姉が直してくれるようになりました。私も義姉もハンディがあるので何をするにも必死でした。こうして、十三年間、二人でひたむきに歩んできました。

大熊中学校を卒業する日、義姉は朝早くからヘルパーさんと一緒に車椅子で来てくれました。涙を流しながら私の卒業を喜んでくれました。嬉しそうに、割れんばかりの拍手をしてくれました。義姉を支えるばかりではなく、私も義姉に支えられているのだと感じました。私は義姉と家族になれて幸せです。

（中面のすごろくクイズの答え）いのちつながるかがやくみらい

〈編集・発行〉福島県教育委員会　令和４年３月

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。